

おり重要な資源であった。ダム建設工事が開始すると、村の人口は2倍に急増しS31年ピークの14,000人近くに達した。村民は工事に雇われ、一時的に現金収入は増大したが、消費者物価は高騰し、田子倉部落は46戸全部水没して転職や離郷を余儀なくされた。

産業構造の推移をみると、90%近い農業人口は大幅に減少し、対照的に第二次、第三次産業の伸びが著しい。第二次産業では建設業が主であり、第三次産業ではサービス業が目立っている。これは第一期工事終了のS34年に只見町が発足し、固定資産税を公共投資に向けた結果であるが、当時、日本最大の水力発電所が建設されて、県内客を中心として年間10万人前後、訪れるようになったためである。S41年、夏期学生村を開始し、民宿設置、スキー場開設と、農工に不適な自然条件を観光的土地利用に役立て、過疎対策の一環としている。

下関市における沿岸漁業の地理学的考察

宇賀敏江

当市は本州の西端に位し、古くから九州と共に我国の西の玄関口として大陸文化の中継地であった。特に明治以後、大陸政策の基地として発展し、大正期の人口増加は全国でもめざましかった。昭和初期に、東シナ海・黄海の漁場開発がすすみ、東洋一の規模を誇る下関漁港が建設され、近年まで日本一の水揚量を誇る遠洋漁業の根拠地となっていた。しかし、昭和41年をピークとして水産資源の枯渇化および当港の主要水揚漁種である中型旋網の漁場の移動による漁場の遠隔化、それに加えて漁業施設の老朽化のため水揚量が減少している。本論文は以上のような背景の中での当市の沿岸漁業の実態を調査し、特に自然環境（海底地形・底質・潮流）による影響を考察した。

当市には13の漁業協同組合があり、そのうち、8漁協が響灘を、2漁協が下関海峡内を、3漁協が周防灘を主な操業区域としている。

各漁協は操業の歴史・立地条件（漁場の自然環境・市街地からの距離）・漁法・漁船規模・漁民数・その他、漁港施設など諸々の要素の組合せによりさまざまな漁業形態を呈していることがわかった。

響灘側は江戸時代に網漁業がなされ、近年まで漁業を専業とする漁村であるのに対し、周防灘側は明治期に農閑期である冬季に農業の副業として養殖ノリの栽培が採用され、現在でこそ養殖技術

の進歩でノリ収入の方が多く、市内でも恵まれた漁業経営を行なっているが、10年前までは7:3の割合で農業に力を入れた漁村であった。そして以上のような相違は立地条件に起因しているところが多いと思われる。即ち、響灘側は岩石海岸が卓越し、平地がとほしく、又-10m前後の海底に岩礁が多く存在しているために、魚類および水産動物(サザエ・アワビ・ウニ)の成育に適している。そのため漁業を専業とし、磯見漁業や網漁業が主で、特に-10m以深の沖の海底は砂泥が広く分布しているのでエビやカレイなどの底生魚が多く、小型底曳網漁業が盛んである。他方、周防灘側は吉田川・神田川の河口であり平地にとほしい当市にあって比較的広い平地が存在し、ノリ成育に必要な肥料・光・CO₂が豊富な-7m前後の海域が広く分布し、特に冷凍網などの養殖技術の進歩する以前にあってはノリ養殖にとって必須の条件であった干出時間が4時間半以上という点は、内海であるために十分に満たされ、あくまでも兼業という型でノリ養殖中心に漁業が行なわれている。次に下関海峡内は、主要航路である事、および潮流が速いことなどで操業条件としては良くないが、急潮流のために海水の交換が良く、昔から良質のワカメの繁茂地であり、又、潮流の方向が変化するために、内海と外海の魚種が取れ、特に、タイ・スズキなどの中・高級魚が取れるので、釣漁業中心で漁業を専業としている。

当市は都市的色彩が濃く、そのため他産業の労働力需要も多いので漁民人口の減少および老令化が目立ち、特にこの傾向は市街地から離れた漁村で顕著である。その理由はモータリゼーションにより通勤が可能になった事および漁業の魅力が低下したためである。他方、市街地の漁協がこの傾向が微弱なのは下関漁港を根拠地としているために漁獲物流通面で優位にあり、漁船の大型化により沖合へも進出しているからである。又、全漁協の傾向として、養殖漁業に力を入れている。

佐伯市の水産地理学的考察

栗 田 逸 子

佐伯湾は典型的なリアス式海岸をなし、魚類繁殖に適する無数の岩礁が発達しており、天然の良湾と漁港に恵まれ古くから沿岸漁業が盛んであった。

佐伯市の漁業は大半を大入島に頼っている。大入島では全戸数のうち約半数(689戸中365戸)が漁業に従事しており、島の代表的漁法としては、イワシ船曳網・延縄・小型機船底曳網・一